

『「教えて考えさせる授業」を創る アドバンス編
「主体的・対話的で深い学び」のための授業設計』市川伸一 図書文化 2020

P10～12

「教えて考えさせる授業」

- 「教えて考えさせる授業」とは、あくまで習得型の授業である
- 習得の授業の中に、教える場面と考えさせる場面を入れるというのが「教えて考えさせる授業」である。
- 「教えて考えさせる授業」は、教師の説明、理解確認、理解深化、自己評価の4つのステップで進行する授業である。 **4段階の授業構成**

教師の説明

生徒にわかりやすいインプットを与えるというのが教師の説明である。

そこから先は考えさせる場面→生徒が考えて表現するというアウトプット活動

「教える」→教師から学習者に情報を提示すると意味で使う。

情報提示・・・言葉、図や動画、演示等

・教科書の説明がわかりにくいところは、教材・教具の工夫が必要

理解確認

習った用語やポイントを自分言葉でペアや小グループで説明する。

- ・答え合わせだけではなく、どうやって解いたのか、解き方のプロセスを自分の言葉で、ノートを指しながら友だちに説明する活動、アウトプット活動を行う。

理解深化

さらに深い理解をめざして、小グループでアイデアを出しあって課題を解決する。

- ・どのような課題を用意するかが重要。教科書の発展問題を用いてもOK。
- ・実技ならばコツやポイントを教わってもなかなかできないので「頭でわかっている状態から、体得した状態になること」を理解深化という。

自己評価

「考えさせる」最後の段階で、いわゆる「振り返り」にあたる。

- ・単に「今日の授業がどれくらいわかったか」「今日はどれくらいがんばったか」を段階評定するのではなく、今日の授業を通じて自分がわかったことは何なのか、まだわからないことは何なのかを、自分でモニターし自分の理解状態を自分に診断して記述することを求める。

あとがきより

「教えて考えさせる授業」とは自立した学習者を育てる授業である

- 「教えて考えさせる授業」「授業を使って学ぶ」という主体的、自律的な学習像をめざすものである。

- ・習得の学習における「予習－授業－復習」というサイクルでは、予習をして疑問をもって授業に出ることを促す。
 - ・未習事項は、まず教科書などを読んでみて、それでわからないことがあるからこそ、授業に出るといことである。
 - ・わかっているかどうかを、自分で説明できるかどうかで確認する。
- 「自立した学習者を育てる」というのは
認知カウンセリングや「教えて考えさせる授業」を通じての大切な目標である。
- 教科書を読んでも十分理解できていない生徒はたくさんいるというという認識から始める。

P, 16～18

「教えて考えさせる授業」の考え方

- 基本的な内容は、予習を含めてまず共通に教え、クラス全体でそれ以上の学習に進む。
「それ以上の学習」とは
- まず、教わったことをきちんと理解しているかどうかを確認する課題を行う。
 - さらに、理解が浅い点を掘り下げたり、習ったことをどのように活用、応用するかがわかるような課題に取り組んだりする。
- 【習得の授業】 → 教科書を見ればそこに出ているような基礎的内容は教師からわかりやすく教え、その先の問題解決に取り組んで、深い理解を伴った習得をめざす。
- 【探究の授業】 → 「基本的原理にあたるものを、数学者のように自力で発見する」ような学習を行う。
- 「考えさせる」の中にも、理解確認、理解深化、自己評価がある。
そして、授業の前には簡単な予習、授業の後には復習を入れて、サイクル全体として「深い理解を伴った習得」をめざす。
一方では、自分で興味関心をもった課題を設定して、それを追求するという探究のサイクルの学習がある。
- 習得と探究をバランスよく、しかも獲得した知識や技能を活用しながら学習活動を進めることが大切である。

「教えて考えさせる授業」が大切にしていること

- 深い理解を伴った習得
「教えて考えさせる授業」で最もこだわっているのは「深い理解を伴った習得」である。
学習や記憶についての考え方
- 【行動主義】・・・何度も反復して習熟することによって知識や行動を身に付けるという考え方
- 【認知主義】・・・情報の意味、規則、構造、因果関係などを理解して自分の知識体系の中に組み込んでいくという考え方
- 「教えて考えさせる授業」は後者の考え方に重点を置いている。

P. 20～21

【メタ認知を促す】

生徒が教科の内容を学習する→認知的な活動

メタ認知とは

人間は、自分の知的能力、理解状態、学習方法などについて意識し、それを高めるようにコントロールすることができるように、「認知している自分」というものを自覚的にとらえることができること。これがメタ認知である。

- ・「メタ」というのは「一段高次の」という意味
- ・メタ認知とは、認知している自分のことを対象化して高次の視点から見るということ。
- ・メタ認知の力をつけること→自律的な学習に 生涯学び続けていくには必要不可欠な力

○自分がわかっているかどうかの目安

- ・「人に説明してみる」活動 理解確認の場面でお互いに説明する活動
- ・予習のときから、「人に説明できそうにないところに付箋を貼っておく」
- ・自己評価では、今日の授業の中で「わかったこと、わからないこと」を具体的に記述

○「わかりましたか」と質問する → メタ認知を促すうえであり役に立たない

深い理解 → 用語や事実の丸暗記でなく、
それらの意味や関連性をつかんで説明できること、
解けて答えがあっているだけでなく、
公式の解き方、構造、使い方などを説明できることなどが深い理解。

授業の中でそれを求めることで、自分の理解状態を診断するメタ認知が育つ。

P. 21～23

【インプットとアウトプットのバランス】

○インプットとアウトプットのメリハリが「教えて考えさせる授業」の大きな特徴

「教師の説明」の場面 → しっかり教える

「理解確認」「理解深化」の場面 → 生徒同士の活発なやりとり

○深い理解を伴った習得の方法

- ・インプット・・・「人にわかりやすく教えてもらう」「わかりやすい本を読む」
受容学習(reception learning) 外からの情報を理解して受け入れる
学習者の負担は少なく、与えられる情報の質がよければ記憶にもよく残る。
- ・アウトプット・・・学習者が自ら考えてそれらを見出すという方法。自力発見、自力解決。
発見学習(discovery learning)
達成感や満足度が高く問題解決の力を育てる。
発見するためにはかなりの学力や努力が必要→発見できずに終わるリスクあり。

「教えて考えさせる授業」→受容学習と発見学習の長所を生かせるように組み合わせたもの

受容学習も → 「受け身ではなかなか身につかない」→このことは非常に大切。

外から与えられた情報でも自分で能動的に理解しようとしなければ、自分の知識として落とし込めない。

↓だからこそ

アウトプットが重要

【理解確認の場面】のアウトプット

- 自分の言葉で用語や解き方を説明することを求める。
 - ・説明することで理解が促進。
 - ・説明できたかどうかで学習者も教師も理解状態を把握できる。

【理解深化の場面】のアウトプット

- 理解深化の段階では、コミュニケーションを通じての協働的な発見学習を行う。
 - ・対話，相談，ノートへの書き込み。

【自己評価の場面】のアウトプット

- ・今日の授業を振り返って、自分の気づいたことやわかったこと、わからなかったことなどをノートやワークシートに記述。

※「教えて考えさせる授業」は、
インプットとアウトプットのバランス（Input-Output バランス）に配慮しながら、
「理解を伴った習得」や「メタ認知の育成」をめざすものである。

P. 31

「教えて考えさせる授業」の三層

①コアの部分：「教えて考えさせる授業」の理念と4段階の授業構成

「教えて考えさせる授業」の最も基本的な特徴

何のために、何を大切にしているのか、4段階の授業構成の意味と必要性を理解して行うことが大切

②プラス α の部分：「教えて考えさせる授業」によく付随している方法常に必須ではないが、しばしば入っているもの。

例えば、授業の理解を促すために予習を入れる
教師の説明場面で教科書を活用する
理解確認で相互説明活動をいれる
理解深化で協働的問題解決場面を入れる 等

③プラス β の部分：各授業者が付け加えている方法

「教えて考えさせる授業」のバリエーションとして、授業者が独自に工夫していれているもの。

例えば、指導案をどんな形式にするか
生徒の実態によっては予習タイムを授業時間内にとる
説明場面での教具やICT教材を工夫する
協働学習場面での机の配置や発表の仕方 等

